

特別分科会 ②

高校・大学がともに考える探究の「モヤモヤ」

－大学生が語る探究のモヤモヤ、探究を支える大学生の挑戦－

- [報告者] 小村 柊翔 (龍谷大学 文学部 歴史学科 3回生)
[報告者] 大見 智美 (京都工芸繊維大学 工芸科学部 応用生物学課程 2回生)
[報告者] 大橋 未都 (京都工芸繊維大学 工芸科学部 応用生物学課程 2回生)
[報告者] 花登 淳平 (京都府立須知高等学校 教諭)
[コーディネーター] 滋野 哲秀 (聖ヨゼフ学園 日星高等学校 校長/元 龍谷大学 文学部 教授)

探究学習は生徒が問いをつくり探究していく活動である。かつての学校では教員が生徒に問うというスタイルが中心だったが、生徒が問いをつくるという探究の過程は、生徒にとっても教員にとっても「モヤモヤ」が生まれる。大学生が自主的に高校の探究学習に関わっている事例や探究学習を経験した大学生の「高校時代のモヤモヤ」を共有し、探究の質を向上させるために高校、大学ができることは何かを議論する。

概 略

コーディネーターからこの分科会の趣旨説明を行い、探究についての課題をカリキュラムや教員の伴走、学校の組織等の視点から説明した。その後、4人の報告者から1人10分程度の報告をしてもらった。

京都工芸繊維大学の学生2人からは、高校で取り組んできた探究の内容について報告、龍谷大学の学生からは、高校生の探究サポートにかかわる大学生の事例をココカラスタジオ(高校生マイプロジェクト)、龍大クエスト(探究をサポートする龍谷大学の学生メンバー)、認定NPO法人カタリバ(学校横断型探究プロジェクト)での経験をもとに探究伴走のモヤモヤを報告、高校教員からは教員として感じている探究の課題を生徒の現状、教員の生徒へのアプローチや連携、校務分掌組織、生徒の探究の観取といった校内の現状について課題を報告してもらった。

4名の報告のあと、テーブルごとに参加者同士の自己紹介を含めた情報交換の時間を少し取りながら報告者に対する質問を各テーブルから出してもらい、質疑応答を繰り返しながら高校現場での探究についてのモヤモヤ、課題を参加者全員で共有し議論した。

全体討論の内容

大学生2人の高校時代の探究についての報告からは、基調講演の中で松下教授が「高校の大学化」と紹介されたSSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)の事例や1・2年生が合同で研究を行い企画から運営まですべて生徒主体で行う探究の事例の報告とその内容について質疑が行われた。その中で、教員の介入について、探究を行うグループ間での格差といった生徒のモヤモヤとともに大学で行う研究の基礎を学ぶことができたこと、大学の教員や他学年の教員との交流、校外の発表会に参加することで他校の生徒と生徒同士の交流から得られた成果、論文の使い方を学べたと

いった探究の成果と「課題設定の難しさ」「決められた期間に結論を出さないといけないこと」「わかりやすく伝えること」といった探究を通した様々な学習内容等が明らかになった。

また、大学生として高校生の探究について伴走を行っている学生からは、学生の視点から見えてくる生徒と教師の考えのズレ、教員からの提案は生徒のやりたいことになっているのか、教師の考えを押し付けることになっていないか、社会課題・地域・SDGsにつなげる必要があるのかといった課題設定の在り方や伴走者としての教員の課題、さらに、探究テーマとして、SDGsや社会課題が選ばれやすい背景について、社会課題が自分事としてつなげやすいといった指摘とともに、1年生のミニ探究テーマとしてアニメ、特撮、スポーツ、音楽、といったテーマをとことん調べ学習して、最終的に社会課題につながるという探究でもいいのではないかとといった提案も紹介された。また、高校の探究について大学生、社会人としてかかわり続けることや大学院で学びながら関わることなどの思いも報告された。

高校教員からは探究学習を進めるにあたって2026年度から3年生にも1単位増やすといったカリキュラム上の対応とともに、生徒の探究学習が「調べ学習で終わってしまうことや活動を延長したいがお金や時間という課題」「生徒の興味関心を高めること」「教員のアプローチや連携の難しさ」「探究の分掌がないこと、担当2人が担任、進路指導部長と兼務している」「周りに見本となる事例が少ない、卒業生の見本がまだあまりない」といった課題も報告された。

到達点と今後の課題

前半のフォーラムにおける基調講演、パネルディスカッションの内容を受けた分科会としてその内容を深める適切な学びの場となった。

大学生による高校での探究事例報告や大学生が高校の探究に関わる事例、高校教員からの学校組織としての課題や単位数といったカリキュラム上の課題、生徒への伴走等、探究の成果や課題を報告者と参加者との質疑応答により共有することができた。

今後の課題として、高校の大学化、多様な生徒が在籍する高校での探究の実践など多様な高校が存在する中で、それぞれの高校ならではの探究活動の実践。高校の探究に大学生が関わることの意義。探究に関する管理職のリーダーシップ、探究を動かす高校の校務分掌、カリキュラムにおける課題、教員の伴走(教員の介入といった視点など)、探究に関わる経費等、実践を交流し高校・大学の教職員がネットワークを構築していく場としても、こうした分科会の設定意義を考えていく必要がある。



スライド 1

2025年度第23回高大連携教育フォーラム 特別分科会②

**高校・大学がともに考える探究の「モヤモヤ」
～大学生が語る探究のモヤモヤ、探究を支える大学生の挑戦～**

報告者
 小村 柊翔 (龍谷大学 文学部 歴史学科 3回生)
 大見 智美 (京都工芸繊維大学 工学部 応用生物課程 2回生)
 大橋 未都 (京都工芸繊維大学 工学部 応用生物課程 2回生)
 花登 淳平 (京都府立須知高等学校 教諭)

コーディネーター
 滋野 哲秀 (大学コンソーシアム京都 高大連携推進室員/
 聖ヨゼフ学園 日星高等学校 校長/元 龍谷大学 文学部 教授)

スライド 2

学校法人 聖ヨゼフ学園 日星高等学校 校長
 龍谷大学里山学術センター客員研究員
 (公財)大学コンソーシアム京都高大連携コーディネーター
 京都府スーパーサポートセンター専門家チーム委員
 京都府立桃山高等学校SSH運営指導委員 京都府立北極高等学校学校運営協議会委員
 非常勤講師(京都工芸繊維大学・滋賀大学・平安女学院大学)
 地学オリンピック日本委員会出題委員
 元 龍谷大学社会学部・文学部 教授
 元 京都教育大学大学院連合教職実践研究科 教授
 学校経営高度化コース主任
 元 京都大学大学院教育学研究科 客員教授 元京都府立高等学校校長(桃山・朱雀)
 @氣象予報士

スライド 3

趣旨説明

探究学習は生徒が問いをつくり探究していく活動である。かつての学校では教員が生徒に問うというスタイルが中心だったが、生徒が問いをつくるという探究の過程は、生徒にとっても教員にとっても「モヤモヤ」が生まれる。本分科会では、大学生が自主的に高校の探究学習に関わっている事例や探究学習を経験した大学生の「高校時代のモヤモヤ」、伴走する教員のモヤモヤを共有し、探究の質を向上させるために高校、大学ができることは何かを議論する。

スライド 4

探究のサイクルを回す

探究的な学習における児童の学習の姿

小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編

中学校・高等学校も同じ

2017年学習指導要領解説

- 日常生活や社会に目を向け、児童・生徒が自ら課題を設定する。
- 探究の過程を経由する。
 ① 課題の設定
 ② 情報の収集
 ③ 整理・分析
 ④ まとめ・表現
- 自らの考えや課題が新たに更新され、探究の過程が繰り返される。

スライド 5

「総合的な探究の時間(高等学校)のカリキュラム例

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1年	準備 探究のテーマ探し 調査 まとめ 発表 探究開始 あるいは、いくつかの大きなテーマを示し、探究の方法を学ぶ											
2年	探究を行う				中間発表				まとめ・発表			
3年	(論文作成、英語でプレゼン 他校との交流など) 発表は ポスター、スライドなどいろいろ考えられる											

スライド 6

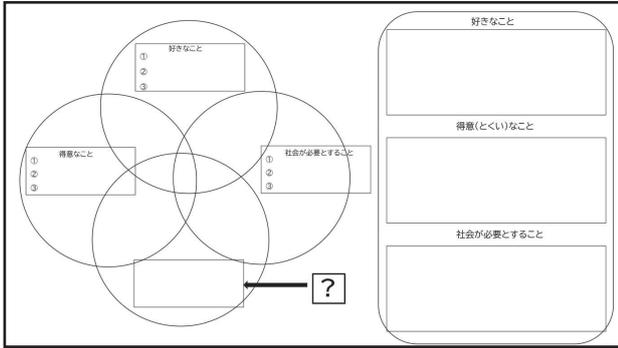
生きがいがある人は知っている
人生で大切な4つの要素
前野 隆司 から引用
日経BOOKプラス 2023.4.3

<https://bookplus.nikkei.com/atcl/column/041500053/031000120/>

図表1 ikigai ベン図

マーク・ウィンツによる回解をもとに作成。
<https://theviewinside.me/what-is-your-ikigai/>
<https://theviewinside.me/meme-seeding/>

スライド 7



スライド 8

問いのデザイン 安齋勇樹・塩瀬隆之著(2020) 学芸出版社より

素朴思考 これはなんだ？ どうしてだろう？

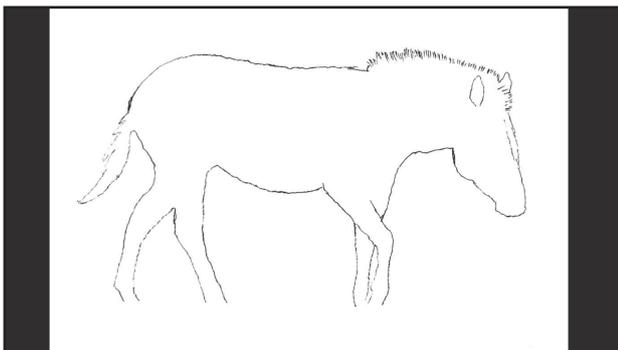
天邪鬼思考 アイデアを潰すような一言 それはホンマか

道具思考 スマホで、望遠鏡で景色を見るとあの人が、これを見たらどう考えるか

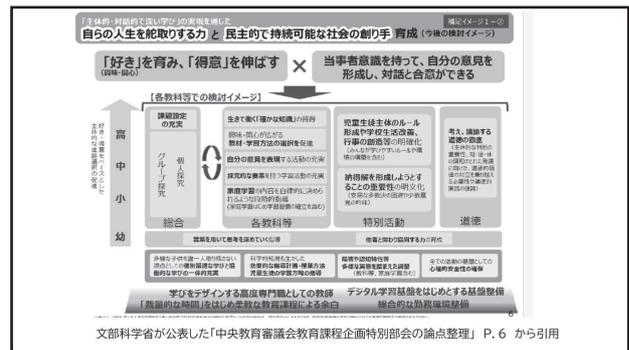
構造化思考 問題を構造的にとらえる考え方
学校の成績が良くない原因
成績が上がればお小遣いも上がるか？

哲学的思考 問題を形づくっている要素や関係性は？
物事の本質をとらえる営み 教育とは何か？
恋愛とは何か？
対話し、納得できる共通理解に到達すること

スライド 9



スライド 10



スライド 1

大学生伴走者の視点から考える現在の探究のモヤモヤ

龍谷大学 文学部 歴史学科 3回生
学生団体 龍大クエスト 代表 小村柁翔

スライド 2

□目次

- 自己紹介
- 探究に関わり始めたきっかけ・活動内容紹介
- 探究伴走において感じているモヤモヤ その1
- 探究伴走において感じているモヤモヤ その2
- これからについて

スライド 3

□自己紹介



小村柁翔 Komura Shuto
龍谷大学 文学部 歴史学科 3回生
学生団体 龍大クエスト代表
大阪府出身

大阪府泉大津市出身。高校はSSH・GLHに指定されている大阪府立岸和田高校に在籍し、課題研究に取り組む。現在は取り組んだ経験を活かし、龍谷大学内の有志での学生団体「龍大クエスト」で代表を務めながら日星高校の探究学習のサポート、和田中学校との交流会運営を行う。また個人として認定NPO法人カタリバの「学校横断型探究プロジェクト」内のオンライン合同授業のサポーターなども行っている。

スライド 4

探究に関わり始めたきっかけ・
活動内容紹介

スライド 5

□探究に関わり始めたきっかけ

【きっかけ】
大学の授業での滋野正道先生との出会い→(一社)ココカラスタジオに参加

教育分野・子どもへの興味関心	高校時代の探究学習(課題研究)での経験	教員志望で現場や生徒と関わってみたい!という想い
----------------	---------------------	--------------------------

スライド 6

□活動内容紹介

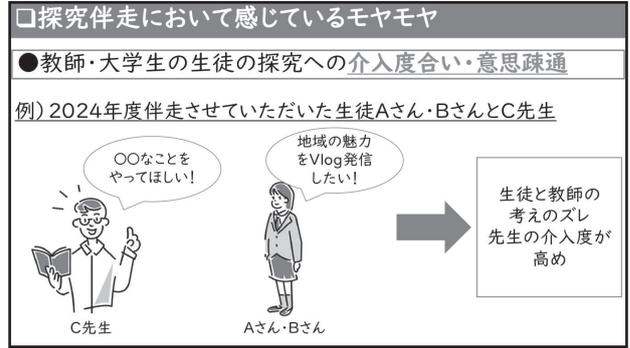
【龍大クエストとして】
・高校現場(現在は日星高校)探究の授業にオンラインで参加し、伴走支援
※学期に1回程度現地訪問をし直接サポート

【個人として】
・認定NPO法人カタリバの「学校横断型探究プロジェクト」内のオンライン合同授業にサポーターとして参加
・その他中期的なオンライン伴走でのメンターを務めている。

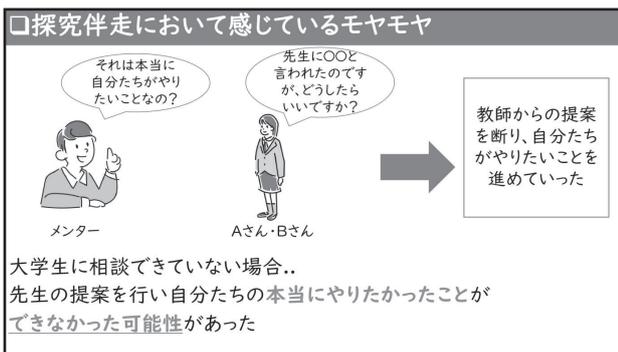
スライド 7



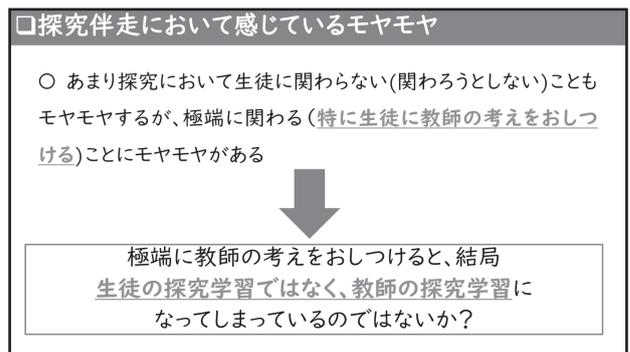
スライド 8



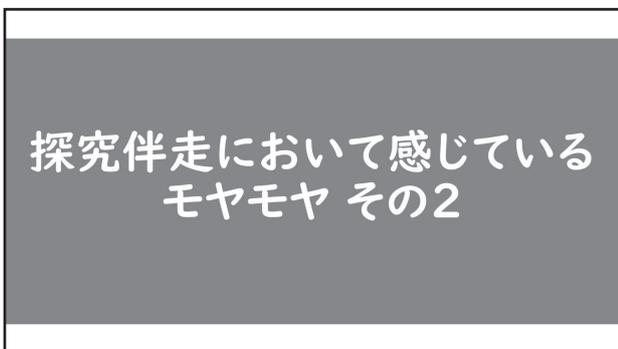
スライド 9



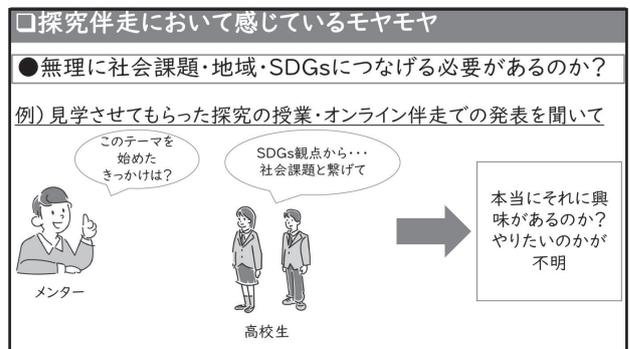
スライド 10



スライド 11



スライド 12



スライド 13

□探究伴走において感じているモヤモヤ

○社会課題・SDGsが探究テーマに選ばれやすい背景

- ・大学の推薦入試の面接等で使用することができる
- ・社会課題として挙がっていて自分事としてつなげやすい

★自分で興味があってそのテーマを選ぶことはもちろんOK

↓
ただ..

学校・教師側でそのテーマで探究をしなさいというのは、
生徒の主体性を阻害してしまっているのではないか？

スライド 14

□探究伴走において感じているモヤモヤ

●探究をこういったテーマ・方法で行ってもいいのではないか

- ・アニメや特撮といったテーマ
- ・スポーツや音楽といったテーマ
- ・とことんまで調べ学習をしてまとめる方法

⇒最終的にそのことを発信することができればいいのでは？

このような形で最初から地域や社会とつながるのではなく、
最後の成果という部分でのつながりでも問題ないのでは
ないか？

自分の興味・関心から始めることが1番大事なことでは？

スライド 15

これからについて

スライド 16

□これからについて(自分としてできる・やりたいこと)

○現在の探究における問題点

- ・答えのないものであり教員側も経験をしていないために、
どのように生徒を伴走をすればいいのかわからない
- ・そもそも大学の授業で指導方法をあまり学べていない

↓

大学生、そして社会人として探究に関わり続ける！
大学院に行って探究について教科学習と絡めて研究をしてみたい！

スライド 17

ご清聴ありがとうございました！

スライド 1



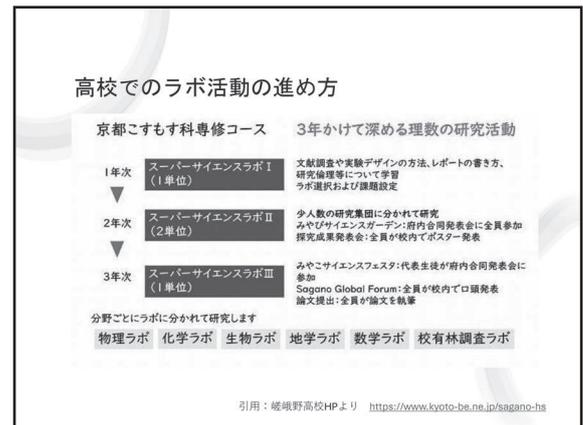
スライド 2



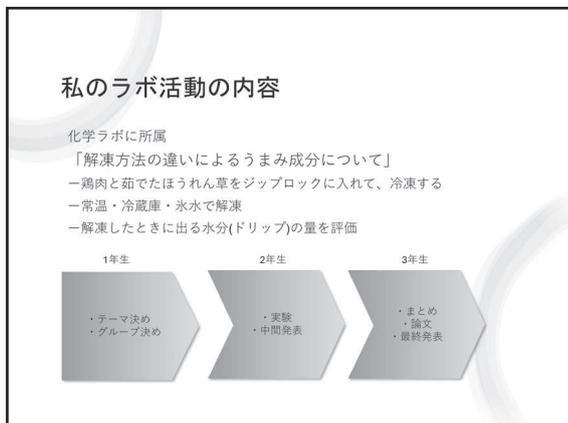
スライド 3



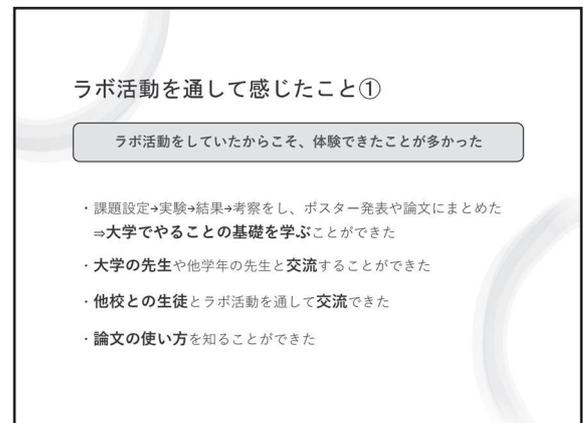
スライド 4



スライド 5



スライド 6



スライド 7

ラボ活動を通して感じたこと②

研究って大変だな

- ・ テーマ決め
- ・ 実験方法の検討
- ・ 結果から考えられる考察
- ・ ポスター発表や論文
 - ⇒ いかにかかりやすく伝えるか

スライド 8

おわりに

- ・ 高校3年間を通して、自分で道筋を考える力がついた
 - ⇒ 大学の実験でも役に立っている
 - 例) この操作をしているから、この結果が出てくるんだな
- ・ ラボ活動から得たことが、大学生活にも生かされている

研究室では免疫系のことを勉強したいな...

スライド 9

ご清聴
ありがとうございました

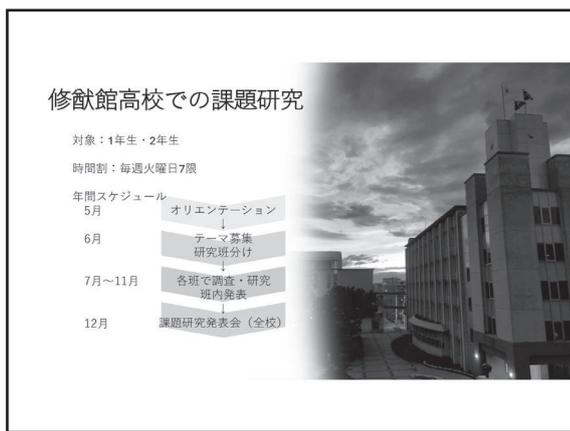
スライド 1



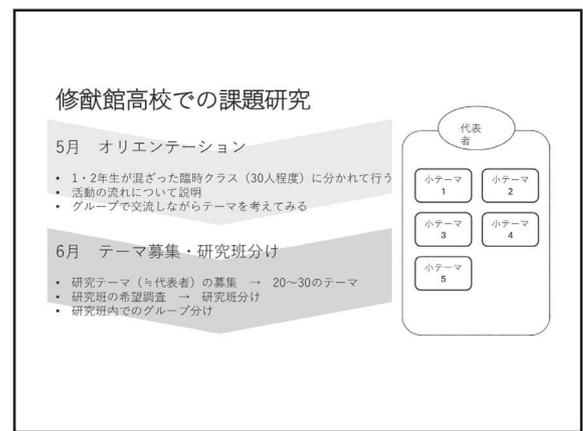
スライド 2



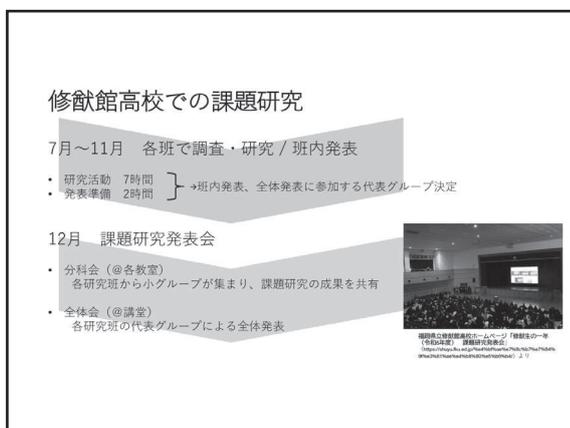
スライド 3



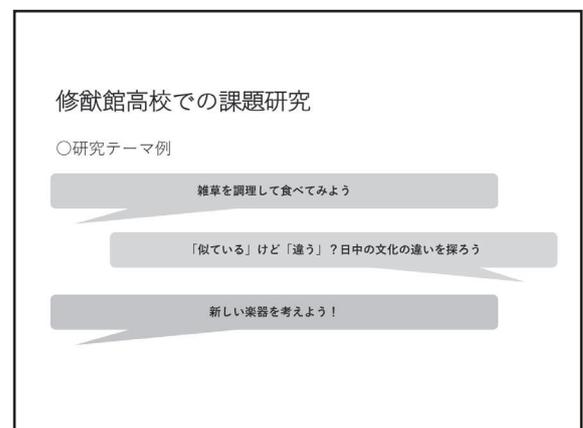
スライド 4



スライド 5



スライド 6



特別分科会 2

スライド7

修猷館高校での課題研究

- 良かったこと
 - ・ 1・2年生合同で研究を行う
→1年生は2年生の助けを借りながら研究できる
 - ・ 企画から運営まですべて生徒主体
→行事運営を経験できる
- モヤモヤしたこと
 - ・ 教員の介入ほとんどなし
→不安が大きいまま進んでいく場面も
 - ・ 班・グループごとの研究
→グループ格差、想定と異なるテーマで研究を行うことになる可能性

スライド8

修猷館高校での課題研究

- 大学生活とのつながり
 - (私の場合)
文系・理系が入り混じった中での研究だったため
大学での学びとは全く違う分野の研究テーマ
↓
直接的なつながりはないが
 - ・ テーマの設定
 - ・ 研究方法の模索
 - ・ 研究計画の調整
 - ・ 研究班としての関係性づくり
の基礎を学んだ

スライド9



ご清聴ありがとうございました。

スライド7

総探についてのもやもや

- ・調べ学習の延長になってしまう（でも行動には限度がある）
お金の補助なり時間の補助があれば・・・
- ・興味関心（知的好奇心）がある生徒がいない
- ・教員側のアプローチや連携がむずかしい
- ・周りにいい見本がなくエンジンがかからない

スライド8

1. 学習過程を探究の過程にすること

学習過程を探究の過程とするためには、以下のようになることが重要である。

- ①【課題の設定】 体験活動などを通して、課題を設定し課題意識をもつ ←
- ②【情報の収集】 必要な情報を取り出したり収集したりする
- ③【整理・分析】 収集した情報を、整理したり分析したりして思考する
- ④【まとめ・表現】 気づきや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する

引用：文部科学省（2013）「今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開」

課題（テーマ）を生徒たちが自分で
見つけることが一番難しい！！

スライド9

興味関心を引き出す
アプローチがわからない

探究の出発点でもあり、目標でもある
興味関心（知的好奇心）

行動に移す補助（お金など）
がないと動きづらい